

太田雅子: 自己肯定感・主体性を育む保育・育児についての考察

自己肯定感・主体性を育む保育・育児についての考察

—キリスト教保育の視点から—

太田 雅子* 福田 充男** 出村 るり子***

* 聖隷クリストファー大学

** 特定非営利法人教育政策ラボラトリ（聖隷クリストファー大学非常勤講師）

*** 北陸学院第一幼稚園

A Study on Teaching and Child-rearing Practices to Promote Children's Sense of Worth and Self-direction

: from the Viewpoint of Christian Education and Child-care

Masako OTA* Mitsuo FUKUDA** Ruriko DEMURA***

* Seirei Christopher University

** NPO-Educational Policy Laboratory

*** Hokuriku-Gakuin Daiichi Kindergarten

Abstract

From the viewpoint of Christian education, especially early childhood education and child-rearing, the promotion of a child's self-worth and self-direction is very significant. This is achieved through quality teaching practices. In order to improve the quality of child rearing and teaching practices, self-reflection and evaluation are necessary. Certain theories, principles and methods (supported by studies and research) are available as reference tools for the self-evaluation of teachers and those involved with child-rearing. Two theories are introduced in this paper which promote quality teaching practices: "Effective Teacher Training" and "The Boundaries". Also included are concrete examples from "Arigato child rearing workshop" and "Hokurikugakuin-Daiichi Kindergarten".

キーワード：自己肯定感、主体性、キリスト教保育

Key words : sense of worth, self-direction, Christian education and child-care

はじめに

キリスト教保育指針（キリスト教保育連盟）－キリスト教保育のねらいには「子どもが自分自身を大切なひとりとして受け入れられていることを感じ取り、自分自身を喜びと感謝をもって受け入れるようになる」と示されている。保育所保育指針（厚生労働省）「保育のねらい及び内容・養護・情緒の安定」の中にも、「一人一人の子どもが、周囲から主体として受け止められ主体として育ち、自分を肯定する気持ちが育まれるようにする」と記されている。このように自己肯定感や主体性を育むことは、保育・育児における最優先的課題である。

乳幼児期において自己肯定感・主体性を育むとは、自己に対する信頼感・自信、自己の存在が尊重されている、自分には価値があるという自分についてのイメージを持つことがことできるようにすることである。

自己肯定感・主体性を育むことは、人間関係を円滑にしたり、人生の中で困難な状況に直面した時にもあきらめないで、乗り越えていくための基盤を作ることにもなる。自己肯定というのは「ありのままの自分の姿を事実として受け入れること」であり、欠点も含めて、自分そのものであると、自己の存在を肯定するということである。しかし悪いことを善いこととして容認することや問題点や課題を放っておくことではない。先ずもって自分の存在は尊重されている、保障されていると感じられる時、人は自ら課題に向き合おうという思いを持つことができ、課題を克服しながら、成長することができる。一方、自分は価値がないと思っていると、自分の問題点を認めることが困難になる。それを認めると、自分の存在が危機にさらされると

感じてしまうからである。故に課題の克服が難しくなるのである。

健全な自分に対するイメージや、自己肯定感や主体性を育む重要性については保育に携わる者は理解し、幼稚園・保育園では保育目標として掲げているところが多い。しかし日々の保育や育児の実際は、そうした子どもの育ちを支えるものに果たしてなっているだろうか。どのような養育者（保育者）の関わり方や方法が有効かを検証すべきであろう。

保育・育児を振り返り、評価・改善を図ることによって、子どもの育ちを確かなものにして行くが、実践の見直しに当たっては参照するもの・指標となるものが必要である。すなわち、学問的根拠に裏付けられたより正確な子ども理解、適切な援助の方法、保育・育児の原理・原則に照らし合わせてみることである。養育者が子どもと関わる仕方・言動は、その時の養育者の認識（知識・思考）や感情によって引き起される。この認識の枠組みは、今までのあらゆる経験からの学習によって作られる。そうであるからこそ、自分の認識が正しいかを照合・確認することが大事となる。

本稿においては、自己肯定感・主体性を育むための保育・育児の指標として活用できると考えられる理論や実践方法を紹介・説明する。これらは筆者らが保育実践、親支援、保育者研修等に取り入れている Teacher Effectiveness Training (TET) というメソッド、「バウンダリーズ（境界線）」の概念である。さらに「ありがとう！子育てワークショップ」の実際、北陸学院第一幼稚園の実践を通して自己肯定感・主体性を育むための具体的な方法や保育・育児のポイントが何であるのかを示す。

1-1 Teacher Effectiveness Training (TET)

Teacher Effectiveness Training (TET) は、アメリカの心理療法の専門家であるトーマス・ゴードン (Thomas Gordon) による保育者 (教師) と子どもとの建設的な人間関係構築プログラムである。先んじて Parent Effectiveness Training (PET) 「親としての役割を効果的に果たすための訓練」プログラムが作られ、日本では「親業訓練協会」を中心にその普及が図られている。聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園においては、総園長でもある筆者 (太田) がスタッフに対して TET について講義を行い、テキスト「保育手帖」を全員によく読んでもらい、その内容意識して子どもと関わることを指導している。TET では、子どもが自分の気持ちを受け止めてもらえたと感じる具体的な方法を紹介しているが、その一つに子どもの話を聴く姿勢・「能動的な聞き方」がある。子どもが何か嫌な事柄に対して言葉・表情・泣くなどによって気持ちを表現した時、その不安・不快な気持ちを受け止めてもらっていると分かるための技法である。

次のような事例がある。イスの上に立って遊んでいる子どもに対して、親が「危ないよ、怪我をするから降りなさい」と言葉かけをしたが、「平気だよ」と止めずにいた。案の定イスが倒れて落ちて打撲をした。「ダメじゃない、だから言ったでしょう」という親の言葉に対して、「痛いのは僕なのに、なぜ怒るんだよ」と子どもは抗議した。ここでの親からのメッセージは「危険なことはやめなさい」というものであるが、「痛かった」「悲しかった」という自分の気持ちが無視され、責められていると子どもは受け取っているのである。

以上の事例は、双方の思いにズレが生じてお

り、心のキャッチボールがなされていない状態である。どのような感情であっても、その人物に属するわけであるから、そのまま受け止めてもらえないことは、自分の存在は大切にされていないという思いを抱かせてしまうことになりうる。

そこで、共感している・受け止めていることを表し伝えるための技法として、①子どもの発話を繰り返す、②同じような意味の言葉で言い換える、③気持ちを汲んで言葉にして返す、といったやり方がある。この技法は、大人の言葉によって子どもが自分の感情に気づいたり、言語化の方法を学ぶことにもなり、感情や行動をモニターしながら自分から適切な行動を選び取ることにも繋がる。

大人自身が子どもの行動について困る、嫌であるという気持ちを持っている時には、「わたし」を主語にして語る『わたしメッセージ』という技法が効果的である。子どものどのような行動が自分に影響したか、自分の感情はどうであるのかを表現して伝えるというものであるが、この方法によって、子どもを否定的に評価することを避け、子ども自身が自分の行動と相手に対する影響を客観的に見て、次の行動を決定する余地を与えることを可能にする。「あなた」が主語となる表現では、断定的で自分の意志で行動を変える余地が無いと相手に感じ取らせてしまうのである。

TET・PET の方法は、人間関係において、誰がその感情や行動の主体かをはっきりさせ、自己決定させることを基本としている。

これは次に述べる「バウンダリーズ (境界線)」の概念とも共通している。

1-2 バウンダリーズ (境界線)

「バウンダリーズ (境界線)」は主体・自

己の確立を促す理論とも言えるが、米国の臨床心理学者であるヘンリー・クラウド (Henry Cloud)、ジョン・タウンゼント (John Townsend) が聖書的見地に立って実生活の中で応用する方法を提示している。

バウンダリーは、「自分にはどこまで責任があり、どこからは責任がないか。」ということを確認にする。バウンダリーがはっきりすると自分の責任の範囲が明らかになる。相手と自分の領域が自覚・区別できることにより、互いに相手を自立した人格として尊重し合い、助け合えるような人間関係が築けるようになるのである。バウンダリーの機能として、自分を保護する、自己の存在が外部から脅かされないようにするということが挙げられる。自分にとって良くないものに「ノー」を言い、良いものに「イエス」という態度や習慣を形成することである。健全な心身の育ちのために必要な栄養分を取り込み、有害なものを極力入れないようにするようなことだと言える。乳幼児期におけるバウンダリーの形成では、次の5つの段階と課題がある。

①乳児期・初期：養育者（主として母親）がバウンダリーとなり、子どもを保護する段階である。例えば、物が落ちて大きな音がした時、赤ちゃんは状況がわからないために怯えたり、緊張感や恐怖感のために泣き出す。すると母親はすぐに赤ちゃんを抱っこして安心感を与えようとする。こうした養育者の対応によって、子どもは不安な状況の中でも自分は守られている、大丈夫であるという信頼感を獲得していくのである。逆に養育者自身に非常に不安・鬱的な状態が続いている場合、子どもは母親に抱かれても、母親の精神状態を感じ取り不安感が取り除かれなことがある。さらにこの時期には特に子どもの出すサ

インに対して養育者が敏感であり、子どもにとって必要な欲求が満たされるべきであるが、養育者が自分の内面に囚われて子どものニーズに気づき対応できない場合には、自分は守られている、自分は生きるに値するという肯定的な自己評価の形成に影響が出てしまう。

- ②乳児期中期：親と自分が同じではないと感じ始め、母子一体感からの分離が開始される。ハイハイができるようになると、探索活動を始めるが、この時期には子どもの意志を尊重し、自分でしようとする行為をできる限り禁止しないように努めることが大事である。子どもは行為の主体である自己を認識し、他者との隔たりや結びつきの境界領域を確認する作業を行っているのであるが、そのためには安全な環境作りに留意し、危ないものを周囲に置かないよう気を配る必要がある。
- ③乳児期後期：制限があることを教える段階である。自分のしたい放題が許されるわけではない、自分や他者を傷つける、物を破壊する行為等してはいけないことを分からせる必要がある。人生には制限（限界・範囲）があることを教えることは、相手のバウンダリーを侵してはならないことに気づかせることになる。
- ④幼児期前期：主体性を育みながら情緒的に結びつく人（養育者）との関係を基盤に自己をコントロールする力を養い育てる段階である。この時期、子どもは外からの刺激に対して無意識的に反応する（反射）ことから、言葉によって自分の意識や姿勢を能動的に変える、意識的にコントロールすることができ始める。他者の言葉や助けによって行動がコントロールされる他律的段階から、自分自身へ語りかける言葉（思考）によって、また身についた態度（習慣）によって、自分で行動を

コントロールできるようになる自律的段階へと移行して行く。基本的な生活習慣や人の話を静かに聞くなどの社会生活に必要な態度を身につけていくためには、他律から自律へと子どもが変化・成長するような援助の仕方が求められる。ちょうど着物の「しつけ糸」のように、大人がはじめは要所所で教えたり規制を加えて習慣化するようにしながら、やがては子どもが自主的に習慣や態度を身につけるような手立てを考えることが大事である。子どもの望ましくない行動は制約するものの、子どもの存在自体は受け入れている、愛情的結びつきがあることを言葉、表情、態度で表現することに留意すべきである。

- ⑤幼児期後期～児童期：基本的な生活習慣・学習等において、自分のすべきことは自分であるという姿勢が身につくようにすることが課題である。大人が肩代わりをしないようにすべきであるが、全く放っておくのではなく、子どもが何に躓いているのかを見極め、手がかりや足場となるものを用意し、しようとしていることを達成できるように援助する必要がある。すなわち子どもの能力の範囲を見極めて、できることをさせ、達成感や有能感を味わうことができるように配慮するのである。指示することが少ない、答えをすぐに出さない、見守るなどして子どもが自分自身で考え・工夫するよう働きかけることが大事である。子どものすべきことを大人が代わってやってしまうと、誰かが何とかしてくれるだろうという責任逃れの姿勢を子どもの内に作り上げてしまうことになる。

子どもの自己肯定感を育むためには、養育者自身の自己肯定感に着目する必要がある。自己肯定感が持てない原因としては、次のようなことが考えられる。①批判的な言動を受け続けた

り、自分の意志や感情を認めてもらえないことが重なると、自分の存在が否定されたと感じる。②他者に必要以上に気遣いをしなければならない環境の中で我慢し続けた場合には、自分の価値に疑問を抱くようになる。③傷による不快や痛みが蓄積されると情動を抑制する機能が働き、その増加に伴い心を閉ざす・防御壁を張り巡らすということが起きる。④「見捨てられ不安」から人との距離をとろうとしてしまう。身についた行動パターンによって無意識的に、または自動的に反応してしまう。

このように（主に生育過程で）形成された思考や行動のパターンは、自覚し認識を変えることにより変化が可能となる。他者からの肯定的メッセージや支援によって思考と行動が変えられ、少しずつ自己を肯定する気持ちが育ってくるのである。養育者自身の自己肯定感に焦点を当てた育児支援プログラムに関して次のセクションにて説明する。

2 「ありがとう！子育てワークショップ」

筆者（福田）が代表を務める特定非営利活動法人教育政策ラボラトリが全国各地で展開している「ありがとう！子育てワークショップ（キッズ版）」は、2、3歳から小学校低学年の子どもを育てている保護者対象のペアレントトレーニングである。トレーニングは3つの要素で構成されている。第1に、保護者の自己肯定感を高めるための演習、第2に、行動分析学に基づく子育てスキルトレーニング、第3に子育てサークルのスタート準備である。

ここでは、第1の要素である「保護者の自己肯定感を高める演習」について説明する。養育者自身の自己肯定感が高められることが、子どもの自己肯定感が育まれるための前提となる。自信がなくて、自分を責めてばかりいる親が、

子どもに肯定的な言葉をかけて承認することは難しい。そこで、ペアレントトレーニングの最初の項目として親自身がまず自分を肯定するための演習を配置している。

本来なら、配偶者や家族や地域の人たちから、「あなたは頑張っているね。」などというような肯定的なメッセージを、言葉や行動や態度で示されるのが自然なのだが、多くの若い親たちは孤立している。虐待する親は、たいがい家族や親族や職場や地域から孤立しているが、そうでない親でも、自己肯定感が高められるような環境にいる人は少ない。自分が親になるまで乳幼児と接した経験がなく、また育児のモデルとなる人が身近にいなかった上に、気軽に相談できる相手がいなくて夫は子育てに無関心などというケースは珍しくない。孤立した状況の中で孤独を感じたり困惑したりしている母親は多い。「子育ては出来て当たり前だし特にほめられるようなことではない」と、周囲の者たちだけでなく、親自身も思い込んでいる節がある。そのため、同じ痛みを知る保護者同士が互いを承認することで、協力して自己肯定感を高めあう機会を設けるができるのではないかと考えた。

最初にすることは、自分の具体的な子育て行動に目を留めて親同士で承認しあう演習である。まず参加者に、自分が子育てをしていて頑張っているな、うまくできたなと思う行動を振り返って書き出すようにと指示する。当たり前だと思えるような行動でもよいし、減多にしない行動でもよい。5つほど書き出したら、二人組になってリストを交換し、パートナーが書き出した適切な行動を基に、面と向かってパートナーをほめるようにと指示する。たとえば、「××さんは、○○ちゃんの幼稚園の送り迎えをしているのですね。素晴らしいお母さんですね。」などと言って褒めるのである。褒められた側の

保護者は、たとえば、「書けと言われたので、無理に絞り出して書いていただけですよ。いつもそうしているわけでもないし…。」などと言い訳しないで、ただ一言「ありがとう」と言って応じるようにと指導している。ほめ言葉を素直に受け取る練習である。

この最初の演習を終えた後、参加者は「子育てのことでこんなに褒められたのは初めてです。」などと口々に告白する。時には半数近い参加者が涙ぐむこともある。最後にアンケートを取るようにしているが、親同士で褒め合う演習が一番良かったと答える参加者が多くいる。この演習の数十分後にワークショップの中で子どもを褒めるロールプレイをするが、親たちは自分が褒められたら嬉しいということをもって経験しているので、子どもを褒めるためのモチベーションが高められる。

親たちが孤立する原因のひとつに、彼ら自身の間関係構築能力の欠如がある。配偶者を含む周囲の無関心が孤立の最大原因ではあるのだが、多くの若い保護者は、核家族で実際範囲が限られた環境の中で育ったため、多様な人間と関係を築くためのコミュニケーション能力が欠けている。若い親が、まず自分が褒められ、次に子どもを褒めるという演習に取り組むことで、相手を承認することで関係を築き上げていくことができる喜びを経験する。ワークショップが終わった後、勘の良い母親は、「今晚、夫もほめてみようかなあ」などと言い出す。そういう意味では、子育てのスキルは、人間関係全般に応用できるものなのである。

親たちの自己肯定感を高めるための2番目の演習は宣言である。まず、同じ組のパートナーに後で読んでもらうための宣言文を作る。以下のようなひな形があるので、所定の場所に、自分の名前と子ども（たち）の名前を書き入れる

だけで宣言文が完成する。

〇〇〇さんが□□□ちゃんを授かったのは、〇〇〇さんが□□□ちゃんの親として、世界中の親の中から選ばれたことの証拠です。他の親と比較する必要はありません。〇〇〇さんは、□□□ちゃんの親として選ばれています。私たちは、そのことの証人です。だから、〇〇〇さんは、□□□ちゃんを育てることができます。そして、私たちも〇〇〇さんを応援します。〇〇〇さんは一人ではありません。

子どもが複数いる場合は、□□□の上下の空いたスペースなどを使って、全員の子どもの名前を書き入れる。そして、宣言するときには、毎回子どもの名前を入れ替えて、子どもの数だけ繰り返して宣言文を読んでもらうようにする。これも二人組で交互にする。

子どもが「授かりもの」であり、授かったということは選ばれたことであり、選ばれた以上は育てることができるのだ、という宣言は、単に素直に受け取られるだけでなく、多くの場合大きな感動を伴って保護者の心に染み通るようである。十月十日（とつきとうか）の間、母親の胎内で生命が成長する神秘を、妊婦なら多少にかかわらず感じ取ることだろう。父親もまた、赤子を抱き上げたときの感触や香り、それを見守る妻の眼差しなど、子どもを授かったときには、ある種の高揚感の内に育てる決意をしたことだろう。しかし、孤立した環境の中で子育てにかかわる雑事に振り回されていると、そのような感動を忘れてしまうようである。

この宣言は、世界にひとつの生命を生み出すという神聖な営みに伴う畏敬のような感覚を想起するためのスイッチとなるのだと考える。自分の子どものために選ばれて親とされたという

「垂直の関係」を意識することで、使命感を確認し、自信とやる気を取り戻す。また、「あなたを応援します。」という言葉は、孤立している親たちに、自分たちには仲間がいるという連帯感、つまり「水平の関係」への期待を呼び起こすのである。

宣言の演習の直後に、「定期的にこのような宣言をし合うのはどうですか」と聞くと、ほとんど全員がやってみたいと言う。そのタイミングで、ワークショップの後半に紹介する子育てサークルについて説明することになっている。「ありがとう！子育てワークショップ」では、ワークショップ修了後に、参加者数人で構成する小グループを編成し、定期的に集まって上記の親同士の承認と「育てることができる宣言」の演習を含むいくつかの課題に取り組むようにと勧めている。

デイビッド・スーザ (David A. Sousa)¹は、ある学習をして24時間経った後に、学生が学んだことをどのくらいの割合覚えているかという統計をとった。すると、講義は5パーセント、読書は10パーセント、視聴覚教材による説明は20パーセント、実演すると30パーセント、グループディスカッションすると50パーセント、自分で実践したら75パーセント。さらに、学んだことをすぐに他の人に教えた場合は90パーセントであった。

「ありがとう！子育てワークショップ」では、ロールプレイやディスカッションなどを多用しているが、いくら効果的なワークショップをしても、参加者は翌日には半分の内容を忘れてしまうという計算になる。そのため、ワークショップが終わった後も継続的に運営する子育てサークルを編成して、定期的に保護者が自己肯定感を高め、学んだスキルを生活に適用する様子を報告しあって励まし合い、さらに、他の保護者に

経験を分かち合う仕組みを作っている。

3 「北陸学院第一幼稚園」の実践事例—筆者（出村）による保育記録からの考察

主体性や自立を促すための保育者の援助・指導の仕方について北陸学院第一幼稚園における保育の記録を基に考察する。

<事例1>

A ちゃんが3歳の2学期に第一幼稚園に入園した時、保護者からは新しい環境に馴染みにくい子だということを聞かされた。教師相手にはよく話ができ、言っていることもよく理解し、大人のように話をするのできる子だが、子どもたちとは関わろうとせず、教師の傍にくっついてた。一番始めに出会った私とはよく話をし、職員室にすることが、しばしばあった。徐々に担任と関わるように促しながら様子を見ていったが、いつも教師のそばにいて周囲の子どもたちの様子を見ているといった日々が続いた。保護者もそのことについて気にしており、何とかしてみんなと一緒に遊ぶことができるようにさせて欲しいと要望して来たが、その都度しばらくの時間が必要かもしれない、様子を見ながら少しずつ関わりが持てるように手立てを考え進めていくことを伝えた。A ちゃんについての理解と援助の方法について、教師間の共通理解を図るために話し合いを重ね、まずは教師との信頼関係を保ち、楽しんで園生活が過ごせるように心掛けて行った。

A ちゃんは次第に園に慣れて保育室の中に自分から進んで入っていくことができるようになったが、同年齢の子どもたちと遊ぶまでには行かず、また独りでの遊びに集中するにも大変時間が掛かった。それでも一つひとつ A ちゃんの様子を見ながら傍に寄り添い、一緒に遊び、声を掛けていくことで3歳児クラスの期間は過

ぎて行った。

4歳児クラスに進級をし、担任が代わったことで、また馴染めずに保育室の中に入れないのではないかと多少心配もしたが、新担任の教師に対してはすぐに馴染んだ。しかし友だちの輪の中に入っていくことができないまま1学期を過ぎた。その頃、保護者（母親）が精神的にやや不安定な状態が続いており、このことが影響してA ちゃん自身も不安定になることがあった。家庭での様子は父親を通して知らされており、A ちゃんが安心した気持ちで過ごせることに配慮した。

しばらくして、A ちゃんについて話したいと両親揃って来園した。A ちゃんは4歳になって教師と一緒にあれば少しずつ友だちと関わる姿も見られるようになってきたので、ゆっくり一緒に見守っていかうと話した。しかし保護者には一日も早く積極的になって欲しいという焦る思いがあることを感じた。その後も母親の精神状態があまり思わしくなく、A ちゃんの元気がない様子が度々見られた。また、母親はわが子のできない点ばかりに目を向けたり、まだ決まってもいない父親の転勤を考え、A ちゃんが新しい環境に馴染めないのではないかと先々のことまで心配していた。その間にもA ちゃんの祖父が亡くなったりと、母親にとってさらに不安定になる要因が重なり、育児を前向きに捉えていくことができないでいた。

ある時点でA ちゃんにはお気に入りの友だちができ、その子といつも一緒に遊びたいという思いが出てきた。A ちゃんが友だちに関心を示したことに対して、母親は帰宅後にも友だち作りをしようと、関わりやすい保護者にアプローチして親子での交流を始めた。ところが、このことはA ちゃんにとっては重圧で、気持ちが不安定になっていることが園において感じ

られた。その上2学期の半ばになると、何とかして積極的に他の子と関わるようにさせようと、バレエを習うこと、幼稚園の課外活動の「音楽グループ」や「体育遊び」に参加させたいと申し出て来た。一度に三つのこと始めることは負担がかかると何度か伝えたのだが、母親は頑として譲らず、仕方がなく様子を見ながら次の対応を考えることになった。音楽グループ、体育遊びでも、やはりなかなか馴染むことができずに課外活動担当教師の後ろにくっついていくことが多く、自分から前に出て表現することがない状態が続いた。そこで担当教師は様子を見ながら少しずつAちゃんとの距離をとることを試みた。さらに「今ならやってみることができるよ」とか、「今はこれはすべき時ではないよ」とはっきりと教師の願いや期待を伝えることにも努めた。そうすることによって、段々と自分から前に出て表現したり、思いを伝えたりと変化が見られるようになって行った。

5歳児クラスになって、再度担任が変わったが、二人の担任うち一人は以前からAちゃんに関わりを持っていたため、教師とのつながりを支えに少しずつクラスに馴染んで行った。しかし、気持ちがかかなり不安定な時には職員室に来て私と関わることを求めた。そのような時は、気持ちは受け止めながらも「それはお部屋にいったちゃんと先生にお話ししてごらん」などと、励ましながら、私の要求を明確に伝えることにした。それによって今までは何としても職員室に留まろうとしていたが、「わかったよ」と、すんなり保育室に戻るようになり、徐々に友達の輪の中に入ろうとする様子が見られるようになった。

一方、母親は育児・発達相談の専門機関へAちゃんを何回か連れて通っていたが、その報告を受けたのが2学期の半ばであった。そこでの

診断では特に発達の問題はなかったということで安心し、今までのAちゃんの生育の様子についても細かく伝えてくれた。同時に「カウンセリングが必要なのは私かもしれない」などと、母親自身の問題を語り、「今までA子の言動に対して一つ一つ気に掛け心配していたが、近ごろでは少し距離を置いてA子を見ること、安心させる言葉が掛けられるようになった。」と話してくれた。これらの母親の話から入園から今まで、Aちゃんに対する関わり方について園の方針を伝えたり、話し合ってきた内容を少しずつ理解してくれていたことが分かった。

2学期後半では、Aちゃんも次第にグループ活動の中で他の子と一緒に行動したり、自分の意見を言うことができるようになり、友だちとの関係を少しずつ築き上げていくようになった。それでもまだ、友だちと協力するような活動は避ける傾向にあった。そこで、クリスマス・ページェントに向けて、友だちと話し合っセリフを考えたり、やりとりをする必要のある役に誘ってみることにした。最終的にはAちゃんはみんなと一緒に天使の役を演じた。それはAちゃんにとって、一つのことをやり遂げたという満足感につながり、人前で自分を出すこともできるようになり、随分と成長が見られるようになった。

母親自身もAちゃんの自立に向けた関わりをするようになり、それによってバレエ教室などでも、今までにはなかったのびのびと楽しむ姿が見られるようになったと報告してくれた。

卒園時を迎え、Aちゃんの母親から次のような言葉をもらった。「新しい環境に馴れるには時間は掛かるかもしれないけど、この子はこの子なりにきっと友だちを作って行くと思う、それを信じて少し距離を取りながら見守りたい。」と。

以上の保育記録から、Aちゃんの自信・自立に向けての効果的な指導・援助の仕方を見出すことができる。

Aちゃんの不安と自信のなさは、母親の心配・不安と圧力が起因となっていたため、母親（保護者）自身の気づきと変化が重要となるが、幼稚園・保育者のカウンセリングマインドを持った関わりから、母親は次の点に気づいて行く。「Aちゃんが母親自身は別の人格であり、Aちゃんの自立に向けての働きかけが必要である」

保護者に対する園側のアプローチで良かったと思われる具体的な点としては、①保護者（主に母親）の不安な思いや要望を丁寧に聴いて受け止めている。②Aちゃんの変化、成長の様子をその都度、具体的に伝えている。③家庭での様子を知るためにコミュニケーションを図っている。④Aちゃん自身の育ちを信じて、待つことの大切さを伝えている。

保護者支援と並行して、幼稚園においてAちゃんが自信をつけること、友だちとの関係を作るためには、次のような効果的な方法が用いられている。①Aちゃんが安心して過ごせるように、クラス担任が安全基地となって、少しずつクラスの友だちの輪に入れるようにしている。②Aちゃんを受容するだけではなく、様子を見ながら、教師側の期待・要求を伝え、励ましながら徐々に自分からやってみようという姿勢が育つように働きかけている。③教師間の話し合いによりAちゃんについての多面的な理解と援助・指導の手立てを導き出し、共通理解をしながら園全体での支援体制を作っている。

<事例2>

(1) 3歳児のクラスでは、子どもたちがまだ小さいため、どうしても先生が手伝わないとできない事が多くある。しかし、3歳でも自分で

やろうという気持ちは育っているので、どう見極めて手助けをするのかについて教師間で話し合っている。満3歳クラスから進級してきた子が半分いて、新たに4月から入ってきた子が半分いるという状況の中で、慣れている子と新入園の子では活動の差が明らかに見える。椅子を一つ並べるにしても既に経験のある子はすんなりと椅子を持ってきてどこに置くかも自分で決めている。一方、新入園の子にすれば椅子を並べて座り先生の話聞くことも初めての経験となる。それに対して教師は手伝いをするが、いつまで経っても教師がさっさと椅子を並べてしまっている。椅子一つ並べるということでも、自分の椅子だということが分かり、自分なりの考えを持って置く場所を決めている。教師が椅子を並べれば、子どもたちは自分の椅子のところに行って座るだけなので、活動はスムーズに運ぶのであるが、子どもが自分で考え行動する機会を奪ってしまう。

(2) 雨の日に長靴を履いてきて靴箱の中に片付ける時、脱いだ長靴を先に靴箱に入ると、長靴の高さによってふさがれ、内履きが取れなくなる。このことは、靴を出したり入れたりしているうちに自分で気づくのであるが、「先に内履きを出さないといけないよ。」と大人が指示してしまうと、子どもは言われた通りにするが理由がわかっていないことがよくある。

(3) 教師の立てた保育の計画・プログラム通りに保育行う、教師主導であることが往々にある。活動をスムーズに展開させるには、その方が楽な面はあるが、一人ひとりの子どもたちが、本当に興味や関心を持って自分から意欲的に参加しているとは限らない。子どもをよく見て、何を思い考えているかに対して教師が注意を払うこと、教師の手助けが必要なのはどこかと考える保育にしたいと教師間で話し合っている。

(4) 5月のある日、久しぶりに外に出て遊べるということで、園庭中を思いっきり走り回っていて日よけテントのポールにぶつかり、大きなたんこぶ作った子がいた。泣くことはなかったが、ショックは大きかったようだった。その後、手当をしてもらって食事の席についてデザートの果物を見るや、「先生、今日のデザートはデコポン?」と尋ねたそうである。教師が「違うよ。オレンジだよ」と答えたと、自分のおでこを指さして「でこ、ポン!」と言ったので、教師たちは思わず吹き出してしまった。ショックなことを経験した後すぐに、このような上手いシャレが出たことやこの子のユーモアに感心したそうである。子どもに寄り添うというのは、子どもの言葉を聞き逃さないで、その子が感じていること、考えていることを一緒に味わうことではないかと教えられた出来事であった。

以上の実践記録から次のような主体性・自発性に向けての援助・指導のポイントを読み取ることができる。

- ①大人がいつも指示を与えたり、先走ってやったり教えることを避け、一人ひとりの子どもの実態を把握し、どこまで手助けが必要かを見極め援助していく。
- ②表情や言葉から子どもの内面を理解し、気持ちや思いを共感・共有する。個々と十分なコミュニケーションを図り、子どもが自分の思いを喜んで表現できるような温かい雰囲気を作るようにする。

まとめ

自己肯定感と主体性は切り離すことはできず、両方は一緒になって育まれる。主体=自己という存在が尊重され、自己発揮できていると

子どもが実感することが、自己肯定感そのものである。

TET (PET) では、個々に属する感情を、まずはそのまま受け止めるスキルを獲得することを提案している。さらに、相手と自分の関係性において、子どもが自分の言動をモニターし自ら行動を変えるための余地を与える技法を教えている。

バウンダリーズ (境界線) の理論は、自己と他者のそれぞれの責任の範囲を明らかにし、相互の存在が尊重されることに重点を置いている。乳幼児期における養育者の関わり方については、基本的信頼感、自発性、自律性、自立性、有能感の育ちという課題を意識することを提示している。

「ありがとう! 子育てワークショップ」の実際からは、養育者 (親) 自身の自己肯定感を高める方法、親同士が互いに認め支え合う機能を持つケアリング・コミュニティの形成の具体的方法について学ぶことができる。

北陸学院第一幼稚園の実践から特に着目することとして、受容することと同時に、望ましい姿への変化に向けて、期待する・要求する・励ますというアプローチが有効であることがわかる。また、子どもが自ら考え行動し、達成感からの自信を得るためには、放っておくのではなく、どこまでの手助けが必要なのか (最小限の援助) を考えることが大事であることを示唆している。

おわりに

自己否定は私たちを「愛する者」と呼んで下さる神の声に背を向けることであり、人間が「愛されている存在」であることは真理であると、ヘンリ・ナウエン (Henri J. M. Nouwen)²は

述べている。しかし現実には、「自分に価値があることを証明しなさい。時流に乗り、注目を浴び、威勢のよいことをしなさい。そうすれば、あなたがそんなに欲しがっている愛は得られる」という別の世の中に浸透する大きな声を聴いているとナウエンは続けている。

私たちが「愛されている存在」であるというアイデンティティを持つことが今の時代には困難だとするならば、キリスト教保育・育児が目指す「愛されている者」としての自己イメージが形成されることは大変重要である。しかし、それは周囲の大人の具体的な関わり方によって左右されるため、観念や理論に留まるのではなく、保育・育児における一つ一つの場面で、適切・妥当な関わりが実行される必要がある。この適切性・妥当性は学問的根拠に立つこと、または実践の中での省察・熟考によって見出される。その上で養育者・保育者自身がスキルを獲得し、いとも自然に振る舞えるようになるまで訓練されるべきであろう。

保育・育児は「いのち」を育む働きである。いのちとは自ら始動し、自ら方向づけし、力と活動を自ら維持するものである。故に主体性の尊重なしには、人間は生き活きと生きて行くことができない。いのちは神によって与えられ、神との関係(垂直の関係)と隣人(水平の関係)の中で保たれ豊かにされることを聖書は語っている。それぞれの存在が尊ばれ、深い交わりがある中で人は育つのである。

自己肯定感・主体性の育ちは、自由かつ責任ある人格形成とも言い換えることができる。「自由」という言葉の意味は「責任をもって何かをすることに障害、妨げ、束縛、強制がないこと」と広辞苑には記されている。外からの圧力によってではなく、自由意志を持って自分がなすべきことを知り、それを責任をもって遂行できる

ことではないだろうか。保育・育児の実践においては、他者とは境界を明確とした独立した存在としての「自己が保障される」こと=子どもが自分の感情、思考、選択、願望、意見、行動、能力などが自分に属するとはっきり認められるようにすることである。「大切なひとりとして受け入れられていることを感じ取り、自分自身を喜びと感謝をもって受け入れられるようになる」というキリスト教保育のねらいは、以上のことを意味すると考える。それには保育者(養育者)は子どもを振り回したり無理強いしていないか、大人主体となっていないかをチェックし、細心の注意を払って子どもと関わる必要がある。その上で、子どもが自制・自律できる力を身に着けるように働きかけることである。

さらに、神と隣人との関係において「愛されている」故に「愛する」という責任を果たすことができる自律的な人間への成長・成熟がキリスト教保育・育児が目指すところであり、日々の実践がそのゴールに向っているのかを常に見極めることが求められる。

引用文献

- 1 David A. Sousa 2001 「How the Brain Learns」 Corwin
- 2 ヘンリー・ナウエン (Henri J. M. Nouwen) 1999 「愛されている者の生活―世俗社会に生きる友のために」 あめんどう

参考文献

- 丸屋真也 2004 「新しいかたちの自立の実践：バウンドリーの確立を通して」財団法人ライフ・プランニングセンター
- ヘンリー・クラウド, ジョン・タウンゼント 2006 「境界線～バウンダリーズ」地引網出版
- 近藤千恵(監修) 2010 「保育手帖」親業訓練協会